HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	教師の成長におけるビリーフの変化 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山田, 智久
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第11614号
Issue Date	2014-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/58132
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Tomohisa_Yamada_review.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：山　田　智　久

審査委員	主査　教授	河　合　靖
	副査　教授	小　林　由　子
	副査　准教授	小　河　原　義　朗

学位論文題名

教師の成長におけるビリーフの変化

本論文は，日本語教師の役割観に関するビリーフの変化を，質問紙調査および統計的手法による対象者との共同作業を用いたインタビュー調査により明らかにし，自己研修型教師の成長の過程に考察を加えることを目的としている。第二言語習得研究におけるビリーフ研究は，学習者ビリーフを対象として発展してきた経緯があり，教師のビリーフ研究においても，学習者用の質問紙を転用する形で研究が進められることが多かった。しかし，教師の授業内行動や教育的行為には，学習者ビリーフ用質問紙では検出できない要因が存在しており，これを従来の教師ビリーフ研究の問題点として著者は指摘する。また，先行研究では学習者ビリーフの形成や変化について理論的な考察が加えられてきているが，そこで見られた傾向が教師のビリーフにどうあてはまるかに関する研究はこれからの課題となっている。教師行動のビリーフを研究対象とするにあたって，著者は教師の役割観を視点にデータを収集・分析することで，教師ビリーフの可視化を試みた。研究課題は，教師の役割観を記述式質問紙データから分類すること，それをもとに教師の役割観ビリーフを測定する質問紙を開発すること，教師の役割観ビリーフの変化を個別の対象者について期間をはさんで調査することの３点である。

研究の結果から，著者は次の知見を得たと主張している。日本語教師の役割観は１２項目に分類され，それらは大きく「教師の技術」と「学習者の変容」に関する項目に分けられる。初任教師は学習者主体と教師主体の活動志向の両方を持つが，中堅教師は教師主体，ベテラン教師は学習者主体の活動に志向が移行する。また，教歴のみならず年齢によりビリーフの違いが見られるのは，自身の外国語学習経験からの影響によると推測される。学習者ビリーフの変化において見られたように，教師ビリーフでも変化の強弱に違いが認められ，その過程には同質性を持つビリーフの連結や単独で周辺的に存在するビリーフの消滅などが関わっている。

本論文について，研究成果の意義，方法論的貢献，教育への示唆の３点から審査した。その結果，審査担当者は，次の点においてそれぞれ本論文の意義を認めるものである。１）第二言語習得のビリーフを教師の役割観の視点から可視化を試み，ビリーフの変化に関する理論的な考察に一定の実証的な証左を提供した。２）従来の横断的な研究方法に加えて，３年のインターバルをおいた縦断的な研究を行い，ビリーフの変化を個別の対象者について報告している。３）教師養成研修に転用可能なビリーフの考察手法を分析に用いて，その方法を報告することで応用言語学に直接的な影響が期待できる。以下，順に詳述する。

まず，１点目の研究成果の意義について述べる。第二言語習得のビリーフの研究においては，第二言語学習に関する学習者ビリーフを質問紙により調査して分類する研究が主流であったが，本研究ではビリーフ研究を日本語教師教育の分野に位置づけて，教師の役割観を中心概念として教師の視点から第二言語習得ビリーフを捉え直す新しい視点が認められる。学習者ビリーフ研究で積み上げられてきた概念を発展的に継承するとともに，教師の行動に関するビリーフ概念を提出している。日本語教師教育の現況の俯瞰的な把握にまだ改善の余地が残るが，今まであまりなかった教師のビリーフの時間的な変化を考察しており，そこに新規性を認め，当該分野の発達に寄与すると判断する。

次に，２点目の方法論的貢献について述べる。従来のビリーフ研究は，先行研究で使われた学習者用の質問項目を踏襲して調査する量的な質問紙調査が多かった。本研究では，これらの分析手法に加えて，日本における日本語教育に特有な教師の側のビリーフを抽出しながら新たに質問紙を開発している。また，従来においては一度きりの横断的研究が主流であったが，本研究では３年の間隔をおいて縦断的に調査し，同一被験者のビリーフ変化の分析を試みている。調査対象者の規模と属性に研究成果の一般化へ向けての今後の課題が残るが，本研究の結果解釈を行う上で大きな影響はないと判断する。

最後に，３点目の教育への示唆に関する評価を述べる。本研究では，PAC 分析と呼ばれる手法を用いて教師個別のビリーフの変化を考察しているが，この過程を詳述しこの分析手法利用の一事例として紹介している。これにより，日本語教育のみならず英語など他言語の教員研修への応用の可能性が期待できる。したがって，本論文は応用言語学，とくに第二言語教育の教師養成分野に対して十分な示唆を与えうる教育的意義を有すると判断する。

以上の３点において，本論文は高い学術的意義を持つものである。よって著者は，北海道大学博士（学術）の学位を授与される資格があるものと認める。